

# 平安和文会話文における準体句 — 係助詞「こそ」「なむ」「ぞ」「や」後接の場合 —

土岐 留美江

日本語教育講座

## Quasi-nominal phrases in Heian Japanese Conversational Texts — Cases with Postpositional Particle “koso” “namu” “zo” “ya” —

Rumie TOKI

Department of Teaching Japanese as a Foreign Language, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

### Abstract

This paper examines lexical-semantic properties of verbs, adjectives and auxiliaries appearing in quasi-nominal phrases (quasi-nominal construction with adnominal verbal ending) which are accompanied by postpositional particle “koso,” “namu,” “zo,” and “ya,” in comparison with those with other postpositional particle such as “wa” and “mo,” and other attributive constructions such as adnominal clauses or final-attributives (sentences ending in adnominal form) in colloquial Heian Japanese.

The specific findings are as follows:

- (a) In quasi-nominal phrases with postpositional particle “koso,” “namu,” “zo,” and “ya,” verbs of motion/change, verbs of emotion/thought/perception, verbs of existence are most frequent, in descending order.
- (b) In quasi-nominal phrases with postpositional particle “koso,” “namu,” “zo,” and “ya,” all adjectives types (emotional, attributive and intermediate) appear.
- (c) In quasi-nominal phrases with postpositional particle “koso,” “namu,” “zo,” and “ya,” past and perfect auxiliaries are frequently used, but some conjecture auxiliaries are also frequent.

It is revealed that there are some usage differences between quasi-nominal phrases with postpositional particle “koso,” “namu,” “zo,” and “ya,” and those with other postpositional particle. In order to clarify the relationship between quasi-nominal phrases and final-attributives in the syntax of adnominal-ending forms, it is necessary to examine their uses more extensively, including those accompanied by other postpositional particles.

### 1. はじめに

古代日本語における活用語の連体形には、

- ①連体修飾節を形成する連体用法
- ②そこで文を終止する連体形終止法
- ③名詞を伴わずに連体形だけで名詞句相当の働きをする準体用法

の三つの用法がある。

①は現代日本語にも見られる通常の連体節形成機能であるが、②と③は古代語特有の用法である。

②の連体形終止法については、通常の終止形終止との表現性の差異や文体的特徴、または構文的要因などについて、山内（2003）を代表とする多くの先行研究

がある。

また、③の準体用法については、断定の助動詞の活用語承接の衰退について連体形準体法の消滅と関連づけて論じた信太（1970）や、準体法の消滅過程について連体形や連体形終止との関連で考察した同（1987）、準体助詞「の」の成立との関連を論じた同（2006）、現代語の「の」節「こと」節との関係で、中古語準体句の特徴について述べた近藤（2001）などがある。

古代日本語に見られる連体形の用法の広範囲な広がり、古代語の大きな特徴の一つであり、なぜ、①連体修飾節形成、②文終止、③名詞句形成、という相互にまったく異なると思われる文法機能が、連体形という同一の文法形式により担われるのかという問題が存

在する。

これらの用法の相互の関係については、連体形終止を「準体句の直接表出（山内（2003）p. 141）」と見る解釈がなされており、尾上（1982）などでも同様の立場から連体形終止法の表現性のメカニズムが詳細に分析されている。また、信太知子氏の一連の研究においては、連体形による各用法がしばしば相互に関連づけられて論じられており、特に信太（1996）では、推量辞の出現に着目しつつ、連体句、準体句、接続句、終止形上接句、連体形終止文、係り結び文の六類の句について、連体形による句としての総括的な比較対照が試みられている。

しかし、連体形の各用法の特徴を、データに基づき数量的に比較分析した研究は、いまだ十分になされているとは言い難い。

土岐（2005）では、連体形終止法を終止形終止法や「ぞ」、「なむ」共起の係り結びと比較し、連体形終止をとる場合に現れる連体形は、他の場合と比較して、動詞、形容詞、助動詞の各品詞別に語の頻出度の特徴があることを明らかにした。また、土岐（2008）では、同様の調査を連体節連体形について行い、結果を連体形終止の場合と比較した。その結果、連体節連体形と連体形終止連体形とでは、各品詞別に頻出する語の傾向に異なる様相が見られることを明らかにした。

残る分析対象である準体句のうち、助詞が後接しないケースについては土岐（2009）、助詞「が」が後接するケースについては土岐（2010）、助詞「を」が後接するケースについては土岐（2011）、助詞「に」が後接するケースについては土岐（2012）、助詞「は」が後接するケースについては土岐（2013）、助詞「も」が後接するケースについては土岐（2014）で考察を行った。本稿では、係助詞「こそ」「なむ」「ぞ」「や」が後接する準体句について分析を行う。今後の計画として、以上の考察で扱わなかったその他の助詞の分析を行い、その結果も含めて連体形による連体法、準体法、終止法の関係の考察のまとめを示す予定である。

## 2. 調査対象資料

本稿で分析対象とした資料および使用テキストは以下の通りである。本稿で引用した土岐（2007）の連体法のデータも同様の資料に拠っている。

『源氏物語』岩波新日本古典大系本

一方、土岐（2005）で連体形終止法および終止形終止法の分析対象とした資料および使用テキストは以下のものであり、源氏のみを使用した準体法および連体法の場合とは調査範囲が異なっている。

『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『堤中納言物語』『落窪物語』『源氏物語』『宇津保物語』：宇津保物語はおうふう「うつほ物語全」、大和物語は岩波旧日本古典

大系本、その他は岩波新日本古典大系本による。

また、諸本の校異で当該の形態に異同があるものはすべて対象から除外した。

## 3. 分析対象形式

土岐（2005）で考察した連体形終止については、地の文と会話文とで大きく用法が異なることが先行研究により指摘されているため、会話文中のデータに限定して考察を行った。これらとの比較上、連体法を分析した土岐（2008）や、助詞無し準体法および「が」「を」「に」「も」後接の準体法を分析した土岐（2009）、土岐（2010）、土岐（2011）、土岐（2012）、土岐（2013）、土岐（2014）でも、同様に会話文中のデータに限定して分析を行った。そこで、本稿で扱う「こそ」「なむ」「ぞ」「や」後接の準体法の用例も、以下、会話文中のデータに限定して考察を進めていく。

また、「～給ふ」、「～侍り」、(ラ)ル、(サ)スなどの待遇表現の補助動詞、助動詞が後接している場合は分析対象に含めている。このような待遇表現の接辞が入る場合と入らない場合とで、何らかの相違があるか否かという点については、今後、吟味していく必要がある。

## 4. 分析

### 4.1. 助動詞を含まない動詞準体句

「こそ」「なむ」「ぞ」後接の準体法の用例を、終止形・連体形異形の活用語と、形態からは活用形の判別がつかない終止形・連体形同形の活用語とに分けて、動詞の意味タイプ別に分類したのが、次の表1から表3である。「や」については助動詞を含まない動詞準体句の例は見られなかった。

表1 「こそ」準体法 動詞意味タイプ別分布

	終止・連体 同形	終止・連体 異形	計
動作・変化	10	6	16
存在	0	0	0
感情・思考・知覚	11	3	14
計	21	9	30

表2 「なむ」準体法 動詞意味タイプ別分布

	終止・連体 同形	終止・連体 異形	計
動作・変化	5	2	7
存在	0	1	1
感情・思考・知覚	1	3	4
計	6	6	12

表3 「ぞ」準体法 動詞意味タイプ別分布

	終止・連体 同形	終止・連体 異形	計
動作・変化	1	0	1
存在	0	0	0
感情・思考・知覚	0	0	0
計	1	0	1

用例の絶対数が少ないため、厳密な比較は不可能であるが、以下のグラフ1に三形式の分布を比較する。

「こそ」準体法では存在詞の例が見られず、この点が他の助詞と大きく異なる特徴である。同じく係助詞の「も」準体法でも存在詞の比率が他の助詞と比較して最も小さかった点と通じる。更に、最も多い動作・変化動詞と、感情・思考・知覚動詞の割合の差が非常に小さく、ほぼ拮抗している点でも、「も」準体法の場合に類似している。

「なむ」準体法も「も」準体法とおおむね近い分布を見せているが、多少、動作・変化動詞の割合が増え、感情・思考・知覚動詞の割合が少なくなっている点が異なっている。

「ぞ」準体法は動作・変化動詞の例が1例見られるのみである。

三形式とも、一番比率が高いのが動作・変化動詞であり、次が感情・思考・知覚動詞、一番比率が低いのが存在詞となっている。これは連体法の傾向と一致し、連体形終止法の傾向と比較した場合には、動作・変化動詞と感情・思考・知覚動詞の割合が逆転していると言えよう。

比較のため、以下の表4とグラフ2に、同形活用語と異形活用語の計の数値を用いて、連体法、助詞無し準体法、「は」準体法、「が」準体法、「も」準体法、「を」準体法、「に」準体法、連体形終止法の分布を土岐（2014）から再掲する。

最左端が連体法であり、次の無助詞準体法から、「は」準体法、「が」準体法、「も」準体法、「を」準体法、「に」準体法、連体形終止法と、感情・思考・知覚動詞の比率が高まっていき、ほぼそれに反比例するように動作・変化動詞の比率が下がっている。ただし、係助詞「は」と「も」は他の助詞よりも動作・変化動詞の比率がやや高い。

グラフ1で示した係助詞「こそ」「なむ」「ぞ」のグラフと比較すると、「こそ」は動作・変化動詞の比率で見れば、ほぼ係助詞「は」「も」に並び、感情・思考・知覚動詞の比率で見れば、「を」と「に」の中間に位置している。また、「なむ」は動作・変化動詞の比率で見れば約6割と、すべての形式の中で最も高い比率を示している。感情・思考・知覚動詞の比率で見れば、無助詞と「は」の中間に位置している。「ぞ」については一例のみのため、割合の比較は難しい。

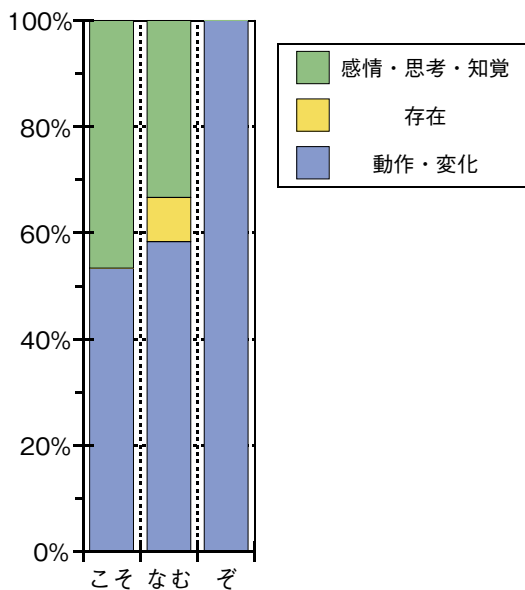
連体法と無助詞準体法と「は」準体法および「も」準体法は動作・変化動詞の比率が最も高く、「が」準体

表4 連体形用法別 動詞意味タイプ別分布一覧

	連体	準無	準は	準が	準も	準を	準に	終止
動作・変化	731	16	30	7	39	45	31	19
存在	155	4	8	4	4	21	7	6
感情・思考・知覚	508	9	22	7	31	53	48	37
計	1394	29	60	18	74	119	86	62

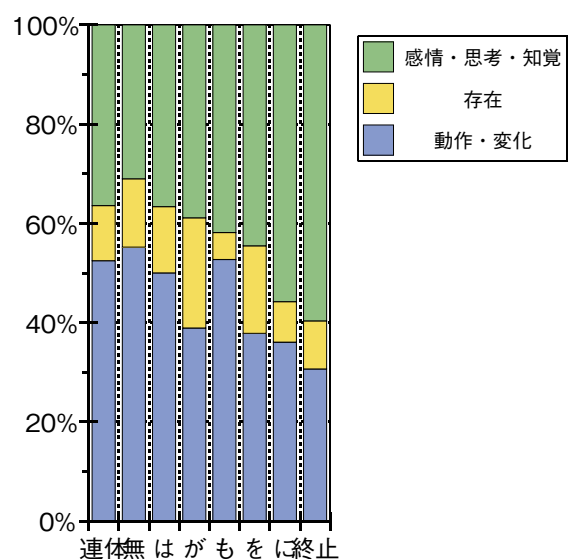
グラフ1

「こそ」「なむ」「ぞ」準体法 動詞意味タイプ別分布



グラフ2

連体形用法別 動詞意味タイプ別分布



法は動作・変化動詞と感情・思考・知覚動詞の比率が同率であり、「を」準体法と「に」準体法と連体形終止法は感情・思考・知覚動詞の比率が最も高かった。これに係助詞「こそ」「なむ」「ぞ」の結果をを重ね合わせて見ると、ほぼ係助詞準体法は、連体法や無助詞準体法と類似した分布を示していると言えよう。

全体として準体法の分布は、無助詞から接続助詞的用法を持つ「を」や「に」へと、相互に連続性を有しながら、動作・変化動詞から感情・思考・知覚動詞へと比重がシフトしていく傾向は変わらないと言えよう。

以下に動詞句準体法の動詞意味タイプ別全例を挙げる。

### 「こそ」

#### 動作・変化動詞

##### 【同形】

- 1) (源氏) 人の心も見知らぬさまにものし給ふこそらうたけれ など、まろがれたる御ひたい髪ひきつくろひ給へど、いよいよ背きてものも聞こえ給はず (2,267,9)
- 2) (内大臣) かれこれに通はし侍こそかしこけれひとりごとにて上手となりけんこそ、めづらしきことなれ (2,291,7)
- 3) (小侍従) この人のかくのみ忘れぬ物に言問ひものし給こそわずらはしく侍れ (3,302,4)
- 4) (明石中宮) 上聞こしめしては、諫めきこえぬが言ふかひなきと、おぼしの給ふこそわりなけれ (4,423,5)
- 5) (薫) 何の罪なる御心ちにか、人の嘆き負ふこそかくあむなれ と、御耳にさし当ててものを多く聞こえ給へば (4,452,7)
- 6) (浮舟) かくのみ言ふこそいと心うけれ。さもありぬべきことと思ひかけばこそあらめ、あるまじきこととみな思ひとるに (5,250,15)
- 7) (侍従、右近など) 亡くなり給へる人とても、骸ををきてもてあつかふこそ世の常なれ、世づかぬけしきにて日ごろも経ば、さらに隠れあらし (5,271,3)
- 8) (女房) いまよりならばせ給こそ、げに若くならせ給ならめ (5,304,2)
- 9) (中将) 極楽といふなる所には、菩薩などもみなかゝることをして、天人なども舞ひ遊ぶこそたうとかなれ。をこなひまぎれ、罪得べきことかは (5,353,8)
- 10) (少将尼) あたら御身を、いみじう沈みてもてなさせ給こそくちおしう、玉に疵あらん心ちし侍れ (5,357,13)

##### 【異形】

- 11) (源氏) 仏にかしこまりきこゆるこそ苦しけれ (2,388,12)
- 12) (女三宮) むつかしき物見するこそいと心うけれ。心ちのいとあしきに (3,380,6)

- 13) (八宮) かやうの遊びなどもせで、あるにもあらで過ぐし来にける年月の、さすがに多く数えらるゝこそかひなけれ などの給つひでも (4,342,1)
- 14) (源氏) 中宮の、遙けき野辺を分けて、いとわざと尋ね取りつゝ放たせ給へる、しるく鳴き伝ふるこそ少なかなれ (4,76,5)
- 15) (明石中宮) まめ人のさすがに人に心とゝめて物語りするこそ、心ちをくれたらむ人は苦しけれ (5,304,8)
- 16) (女房) 二心おはしますはつらけれど、それもことほりなれば、なをわが御前をば幸い人ところは申さめ。かゝる御ありさまにまじらひ給べくもあらざりし所の御住まゐるを、又かへりなまほしげにおぼして、の給はするこそいと心うけれ など、たゞ言ひに言へば (5,96,5)

#### 存在動詞

用例なし。

#### 感情・思考・知覚動詞

##### 【同形】

- 17) (命婦) 上の、まめにおはしますともてなやみきこえさせ給ふこそ、おかしう思ふ給へらるゝおり〜侍れ (1,208,3)
- 18) (源氏) たゞうち思ひめぐらすこそたへがたきこと多かりけれ (1,321,10)
- 19) (源氏) たゞ御ためさう〜しくやと思こそ心ぐるしけれ など語らひきこえ給 (2,245,6)
- 20) (紫上) 馴れゆくこそ、げにうきこと多かりけれとばかりにて (2,260,11)
- 21) (左中弁) さかしき下人もなびきさぶらふこそ、たよりあることに侍らめ (3,217,9)
- 22) (源氏) かくて見たてまつるこそ夢の心ちすれ。いみじく、わが身さへ限りとおぼゆるおり〜のありしはや (3,378,9)
- 23) (源氏) 中将を厭ひ給ふこそ、おとゞは本意なけれ (3,8,3)
- 24) (大納言) 右のおとゞ、われらが見たてまつるには、いと物まめやかに御心をさめ給ふこそをかしけれ (4,241,12)
- 25) (中宮) いと見ぐるしき御さまを、思ひ知るこそおかしけれ。いかでかゝる御癖やめたてまつらん (5,304,15)
- 26) (妹尼) かかる御住まひは、すゞろなることも、あはれ知るこそ世の常のことなれ (5,349,15)
- 27) (妹尼) さりとも、おぼし出づることは多からんを、尽きせず隔て給こそ心うけれ (5,381,15)

##### 【異形】

- 28) (女房) なごりなきさまにあくがれはてさせ給はむ

- ほど、思給ふるこそ と聞こえもやらず(1,321,13)  
 29) (源氏) 和歌 と思給はらるゝこそかひなく  
 (1,378,12)  
 30) (尼たち) 人の物言ひを、さすがにおほし咎むる  
 こそ など、古体の人どもは物めでをしあへり  
 (5,345,13)

「なむ」

動作・変化動詞

【同形】

- 31) (内大臣) よはいふりぬる人、思ひ捨て給ふなんつ  
 らかりける (3,181,5)  
 32) (源氏) 心ひとつにしづめて、ありさまに従ふなん  
 よき (3,232,14)  
 33) (仲人) まことに守のむすめとおほさば、まだ若う  
 などおはすとも、しか伝え侍らんかし。中にあたる  
 なん、姫君とて、守いとかなしうしたまふなる  
 (5,129,10)  
 34) (使者による薫の言) とてもかくても、同じ言ふか  
 ひなさなれど、とちめの事をしも、山がつの譏り  
 をさへ負ふなむ、このためもからき (5,274,2)  
 35) (薫) このには、俗のかたちにていままで過ぐす  
 なむいとあやしき (5,397,13)

【異形】

- 36) (源氏) さらに、かくまで仰せらるゝなん、かへり  
 てはづかしう思たまへらるゝ (4,19,10)  
 37) (僧都) なにがしがいもうと、故衛門の督の北の方  
 にて侍りしが、尼になりて侍なむ、一人持ちては  
 べりし女子を失ひてのち、月日は多く隔て侍しか  
 ど、悲しび絶えず嘆き思ひ給へ侍るに (5,394,13)

存在動詞

【同形】

用例なし。

【異形】

- 38) (朱雀院) あはしく人におとしめらるゝ宿世あ  
 るなん、いとくちおしくかなしき (3,208,4)

感情・思考・知覚動詞

【同形】

- 39) (源氏) なだらかに、やうく人目をも馴らすな  
 む、よきことにははべるべき (3,80,14)

【異形】

- 40) (侍従) などかくはせさせ給。あはれなる御中に  
 心とゞめて書きかはし給へる文は、人にこそ見せ  
 させたまはざらめ、物の底に置かせ給て御覧ず  
 るなん、ほどくにつけてはいとあはれに侍る

(5,249,10)

- 41) (弁) 心うき命の程にて、さまへべの事を見給へ  
 過ぐし、思ひ給へ知り侍るなん、いとはづかしく  
 心うくはべる (5,89,10)  
 42) (弁) かく思ひかけ侍らぬ世の末に、かくて見た  
 てまつり侍なん、かの御世にむつましく仕うまつ  
 りをきししるしのをのづから侍けると、うれしく  
 もかなしくも思ひ給へられはべる (5,89,7)

「ぞ」(文中)

動作・変化動詞(次の1例のみ)

【同形】

- 43) (北の方) 宮の御ことをさへ取りまぜの給ぞ、漏り  
 聞き給はんはいとおしう (3,118,2)

4.2. 助動詞を含まない形容詞準体句

「こそ」「なむ」「ぞ」準体法の形容詞の例について、  
 形容詞の意味についてABCの類型を立てて考察した  
 吉田(1995)にならい、A情意的(感情形容詞、評価  
 形容詞)、C属性的(次元形容詞注)、色彩形容詞、そ  
 の他)、その中間的なB(否定形容詞、程度形容詞、感  
 覚形容詞、時間形容詞)という三つの類型に分け、更  
 にAの感情・評価形容詞の評価的意味について、プ  
 ラス評価は+、マイナス評価は-という独自の符号を付  
 したのが、次の表5から7である。「や」については形  
 容詞の例は見られなかった。

個々の用例総数が少ないため、比較が難しいが、三  
 形式を通して見ると、A(情意的)とB(中間的)と  
 C(属性的)のすべての類型が現れ、かつプラス評価

表5 「こそ」準体法形容詞総数順

形容詞	総数	類型	評価
なし	2	B	0
うつくし	1	A	+
おほつかなし	1	A	-
～がたし	1	A	0
心やすし	1	A	+
若々し	1	A	-

計7例

表6 「なむ」準体法形容詞総数順

形容詞	総数	類型	評価
うつくし	1	A	+
深し	1	C	0

計2例

表7 「ぞ」準体法形容詞総数順

形容詞	総数	類型	評価
ふくつけし	1	A	-

計1例

的な意味を伴う形容詞もマイナス評価的な意味を伴う形容詞もともに現れる。

連体形終止法では、Cの属性的形容詞は一例も見られず、Bの中間的な「なし」が3例見られる以外は、すべてAの情意的形容詞であり、かつ、Aの情意的形容詞の評価的意味合いは「良し」1例を除き、すべてマイナス評価の意味合いを伴うものであった。一方、連体法では形容詞の用例の総数が多いこともあって、ABCすべての類型が観察され、またプラス評価的意味合いを含む形容詞も豊富に見られた。(土岐(2005、2008))

以上の結果を比較すると、「こそ」「なむ」「ぞ」準体法は、土岐(2013)、土岐(2014)で述べた係助詞「は」準体法や「も」準体法の場合と同様に、連体形終止法よりは連体法との共通性の高さを示す結果となっている。

また、動詞節に対する形容詞の出現率を見てみると、「こそ」準体法は23% (動詞節30例、形容詞節7例)、「なむ」準体法は17% (動詞節12例、形容詞節2例)、「ぞ」準体法は100% (動詞節1例、形容詞節1例)となっている。

土岐(2009)、(2010)、(2011)、(2012)、(2013)、(2014)の結果と併せて、他の用法と比較すると、「が」準体法が29% (動詞節21例、形容詞節6例)、助詞無し準体法は14% (動詞節29例、形容詞節4例)、連体形終止法29% (動詞節62例、形容詞節18例)、連体法113% (動詞節1394例、形容詞節1573例)、「を」準体法27% (動詞節119例、形容詞節33例)、「に」準体法33% (動詞節86例、形容詞節28例)、「は」準体法20% (動詞節60例、形容詞節12例)、「も」準体法は30% (動詞節74例、形容詞節22例)である。

「ぞ」準体法については、動詞節の1例は文中用法であり、形容詞節の1例は文末用法である。用法も異なる上に絶対数が少ないため、比較には適さない。

「こそ」と「なむ」の場合を見ると、ほぼ、係助詞「は」や「も」準体法の場合と同様に、連体法よりは連体形終止法との共通性の高さを示していることが読み取れよう。

連体法と終止法の場合については形容詞の総出現数が多いため、分析の便宜上、対象としたのは6例以上出現した形容詞に限定している。準体法の場合は形容詞の総出現数が少ないため、現れたすべての形容詞を扱っている。そのため、厳密な意味での両者の比較は不可能であるが、以上の結果から、「こそ」「なむ」「ぞ」準体法の形容詞については、「は」や「も」などの他の助詞の準体法形容詞と同様に、意味の種類の観点からは連体法に近く、動詞と比較した出現率の観点からは連体形終止法に近いという特徴を示していると言えよう。

以下に準体法形容詞の全用例を示す。

「こそ」

【同形】

44) (命婦)いと若しうおはしますこそ心ぐるしけれ (1,215,9)

【異形】

45) (女房)はや、出でさせ給へ。あぢきなし。心うつくしきこそ など教へきこゆれば (1,224,3)

46) (匂宮)猶、苦し給はば、こよひは宿直にぞ。今は一夜を隔つるもおぼつかなきこそ苦しけれとて (5,144,14)

47) (源氏)さすがに暮らしがたきこそ苦しけれ(3,4,10)

48) (朱雀帝)いま、で御子たちのなきこそさうしけれ (2,30,14)

49) (朱雀院)なつかしくつくしきことの並びなきこそ、世にありがたけれ (3,212,13)

50) (中将)よう思へば、内は中宮おはしますとて、異人はばじらひ給はずや。君に仕ふまつる事は、それが心やすきこそ、むかしよりけうあることにはしけれ (4,278,12)

「なむ」

【同形】

用例なし。

【異形】

51) (匂宮)たれもさべきにこそはとことわらるゝを、隔て給御心の深きなむいと心うき とのたまふにも (5,214,3)

52) (匂宮)すべて、女はやはらかに心うつくしきなんよきこととこそ、其中納言も定むめりしか (5,95,12)

「ぞ」(文末1例のみ)

【同形】

用例なし。

【異形】

53) (源氏)いと多かめるつらに離れたらむ、をくるゝ雁を、しみて尋ね給ふがふくつけきぞ (3,5,12)

#### 4.3. 助動詞を含む準体句

受け身と自発の(ラ)ル、使役の(サ)スなど、待遇表現以外の助動詞が現れる場合について、総数が多い順にまとめたのが次の表8から11である。助動詞が現れる場合、節述語の中心となる品詞は動詞、形容詞、名詞と多岐に渡り、また、複数の助動詞が相互に接続するケースも多いが、述語の中心的品詞の種別は問わず、また、複数の助動詞が現れる場合は最句末のもののみを取り上げる。

表8 「こそ」準体法助動詞総数順

形式	総数
ム	44
ズ	14
タリ	13
リ	9
ケリ	6
キ	5
体言ナリ	4
ケム	3
ル	3
ヌ	2
メリ	2
ラム	2
ス	1
ツ	1
ベシ	1
マジ	1
ラル	1

計112例

表9 「なむ」準体法助動詞総数順

形式	総数
ム	15
タリ	9
キ	1
ズ	1
体言ナリ	1
ヌ	1
メリ	1
リ	1
ル	1

計31例

表10 「ぞ」準体法助動詞総数順

形式	総数
ズ	1
ム	1
リ	1

計3例

表11 「や」準体法助動詞総数順

形式	総数
ム	3
ズ	1
タリ	1

計5例

ナリの場合、終止・連体同形の活用語につくナリは対象から除外した。以下に示した終止ナリと連体ナリは終止・連体異形の活用語につくものである。また、非活用語につくナリを以下では体言ナリとしてある。

また、助動詞自体の活用が終止・連体同形の場合は網掛けで示してある。

「こそ」「なむ」「ぞ」「や」のどれも推量のム、否定のズ、完了・存続のタリ・リが上位を占めている。係助詞「は」や「も」の場合は、共通してムが半数近くを占めて最も多かったが、「は」は2番目に多い助動詞としてズが、「も」は2番目多い助動詞としてキがくるという差が見られた。「こそ」「なむ」「ぞ」「や」を見る限り、おおむね過去のキよりは否定のズのほうが上位に位置するようである。この点で、係助詞「は」のほうにより類似していると言えよう。過去・完了系の助動詞が比較的上位に現れるが、推量系の助動詞との明確な序列が認められるわけではない。

## 5. おわりに

本稿での分析結果を以下にまとめる。

古代日本語会話文中の係助詞「こそ」「なむ」「ぞ」「や」準体句のデータを分析した結果、以下のような特徴が観察された。

1. 助動詞を含まない動詞準体句の場合、現れる動詞の意味タイプは、
  - 1 動作・変化動詞
  - 2 感情・思考・知覚動詞
  - 3 存在詞

の順に多い。存在詞の割合は、連体法や連体形終止法、および他の助詞が後接する準体法の中でも非常に低い。

2. 助動詞を含まない形容詞準体句の場合、形容詞の意味類型は

- A 情緒的
- B 中間的
- C 属性的形容詞

のすべてが現れる。

また、評価の意味を有する形容詞の場合、プラス評価の意味合いを持つものと、マイナス評価の意味合いをもつものとがともに現れる。この点は係助詞「は」及び「も」準体法等と同様である。

3. 助動詞を含む準体句の場合、最も多いのが推量のムである点は係助詞「は」及び「も」準体法と同様である。全体的に、過去・完了系の助動詞が多い傾向はあるが、推量系の助動詞との明確な序列は認められない点で、係助詞「は」及び「も」準体法と同様の傾向を示している。

本稿では係助詞「こそ」「なむ」「ぞ」「や」が後接する準体法について考察を行った。今後も引き続き、他

の助詞が後接する場合の準体法の分析を進め、それらの結果も併せて準体法の位置について考察を行う予定である。

## 注

吉田 (1995) によると、  
せばし、たかし、ちかし、とほし、ふかし、みじかし、ひろし、ほそし、ちひさし  
が例示されている。

## 主要参考文献

- 尾上圭介 (1982) 「文の基本構成・史的展開」森岡健二他編『講座日本語学2 文法史』明治書院1-19  
同 (2001) 『文法と意味I』くろしお出版  
小池清治 (1967) 「連体形終止法の表現効果—今昔物語集・源氏物語を中心に—」『国文学 言語と文芸』54、12-21  
近藤泰弘 (1986) 「〈結び〉の用言の構文的性格」『日本語学』5-2、22-30  
同 (2000) 『日本語記述文法の理論』ひつじ書房  
同 (2001) 「名詞節と項構造」『日本語文法』1-1、41-52  
信太知子 (1970) 「断定の助動詞の活用語承接について—連体形準体法の消滅を背景として—」『国語学』82、29-41  
同 (1987) 「『天草本平家物語』における連体形準体法について—『覚一本』との比較を中心に消滅過程の検討など—」『近代語研究』7、121-139、武蔵野書院  
同 (1996) 「古代語連体形の構成する句の特質—準体句を中心に句相互の関連性について—」『神女大國文』7、172-189  
同 (2006) 「衰退期の連体形準体法と準体助詞「の」—句構造の観点から—」『神女大國文』17、29-44  
土岐留美江 (2005) 「平安和文会話文における連体形終止文」『日本語の研究』1-4、16-31  
同 (2008) 「平安和文会話文における連体修飾連体形と連体形終止連体形の比較分析」『愛知教育大学研究報告 (人文・社会科学編)』57、55-62  
同 (2009) 「平安和文会話文における準体句—助詞が後接しない場合—」『愛知教育大学研究報告 (人文・社会科学編)』58、31-39  
同 (2010) 「平安和文会話文における準体句—助詞「が」後接の場合—」『愛知教育大学研究報告 (人文・社会科学編)』59、15-23  
同 (2011) 「平安和文会話文における準体句—助詞「を」後接の場合—」『愛知教育大学研究報告 (人文・社会科学編)』60、23-33  
同 (2012) 「平安和文会話文における準体句—助詞「に」後接の場合—」『愛知教育大学研究報告 (人文・社会科学編)』61、1-9  
同 (2013) 「平安和文会話文における準体句—助詞「は」後接の場合—」『愛知教育大学研究報告 (人文・社会科学編)』62、19-26  
同 (2014) 「平安和文会話文における準体句—助詞「も」後接の場合—」『愛知教育大学研究報告 (人文・社会科学編)』63、35-42  
山内洋一郎 (1959) 「院政期の連体形終止」『国文学攷』21、240-

- 250、広島大学国語国文学会  
同 (1963) 「奈良時代の連体形終止」『国文学攷』30、33-41、広島大学国語国文学会  
同 (1964) 「助動詞「うず」について—連体形終止の異例として—」『広島大学文学部紀要』23-3、125-152  
同 (1970) 「下二段「たまふ」の終止法—連体形終止の観点から—」『国文学攷』54、55-58、広島大学国語国文学会  
同 (1992) 「平安時代の連体形終止」井上親雄・山内洋一郎編『古代語の構造と展開』25-44、和泉書院  
同 (1997) 「助動詞「うず」の連体形終止について—中世における終止形の残存—」『文教国文学』37、1-8  
同 (2003) 『活用と活用形の通時的研究』清文堂出版  
吉田光浩 (1995) 「平安期形容詞の意味と終止用法について—『枕草子』『源氏物語』『栄花物語』を資料として—」宮地裕・敦子先生古稀記念論集刊行会編『宮地裕・敦子先生古稀記念論集 日本語の研究』112-145、明治書院

(2014年8月11日受理)